



# 2025 年度 大学英語教育学会関西支部大会 JACET Kansai Chapter 2025 Conference

日時:2026 年 3 月 7 日(土)9:20-17:35  
Date and Time: March 7<sup>th</sup> (Sat) 2026, 9:20-17:35

会場:大阪成蹊大学 駅前キャンパス S 館  
〒533-0007 大阪府大阪市東淀川区相川 1 丁目 3-7  
Venue: Osaka Seikei University, Ekimae Campus, Building S

大会テーマ : AI 時代に求められる英語力:実践と評価  
Conference Theme: English Competence in the AI Age-Aspects of  
Practice and Evaluation



一般社団法人 大学英語教育学会 関西支部  
JACET Kansai Chapter

<https://jacet-kansai.org/>

## アクセスガイド/Access Guide

### ●各主要駅からの経路・所要時間(目安)/From Major Stations



### ●阪急京都線相川駅からのルート/Route from Hankyu Aikawa Station



西改札を出てすぐ左へ(細い道を抜けます) Get out from the West Exit and turn left.

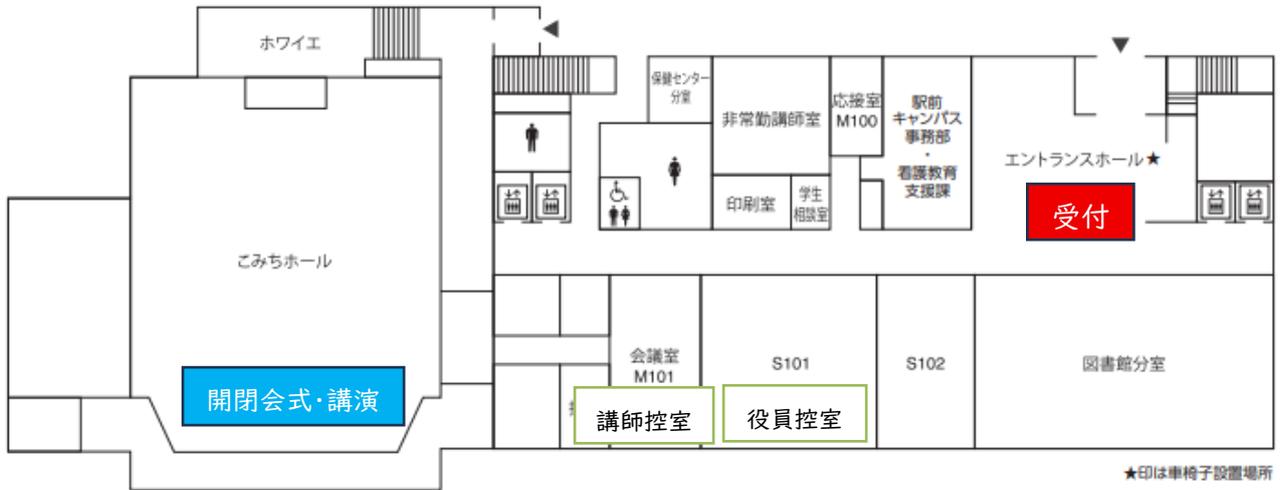
画像出典:Google Map(2026/1 検索)

## 注意事項/Notice

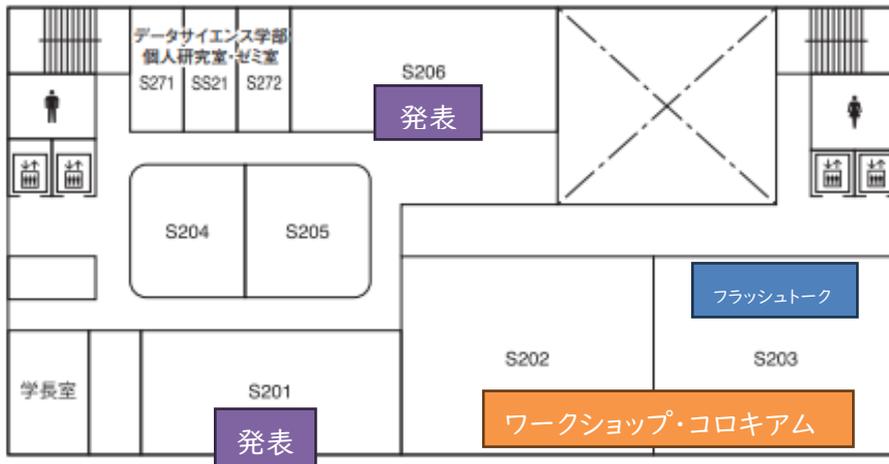
<p><u>使用教室</u> ・全てS号館で実施します。</p> <p>○総合受付: S102(1階) ○開閉会式・基調講演・: こみちホール(1階) ○研究発表:S201/S206/S303/S304(2-3階) ○ワークショップ・コロキウム:S202/S203(2階)・</p> <p>○賛助展示: S301/S302(3階) ○賛助会員フラッシュトーク: S203(2階) ○参加者談話スペース S301/S302(3階)</p> <p><u>発表者への注意</u> ・会場のスクリーン投影はHDMI接続のみ対応しています。HDMI端子を搭載していない機器をご使用の方は、HDMIに変換するアダプターをご持参ください。 ・資料投影用の貸し出しPCの準備はございません。</p> <p><u>昼食・懇親会</u> ・昼食はご持参いただくか、近くのセブンイレブンをご利用ください。 ・ご持参の昼食は8階でお召しあがりください。 ・懇親会は学生食堂 La Riviere(8階)で実施します。</p>	<p><u>Rooms to be used</u> ・All programs are held in the Building S.</p> <p>○ Information Desk: S102 (1st floor) ○ Ceremonies, Keynote Speeches: Komichi Hall (1st floor) ○ Presentations: S201/S206/S303/ S304 (2nd and 3rd floors). ○ Workshops and Colloquia: S202/S203 (2nd floor)</p> <p>○ Exhibits: S301/S302 (3rd floor) ○ Flash Talks: S203 (2nd floor) ○ Participant lounge: S301/S302 (3<sup>rd</sup> floor)</p> <p><u>Notice to the Presenters</u> ・Presenters using devices without an HDMI port are requested to bring their own HDMI adapters. ・No loaner PCs will be available for presentation projection.</p> <p><u>Lunch and Networking Reception</u> ・Please bring your own lunch or use the nearby 7-Eleven. ・Lunch should be taken on the 8<sup>th</sup> floor. ・Networking Reception will be held at the La Riviere Student Cafeteria (8th floor).</p>
--	--

# 教室配置図

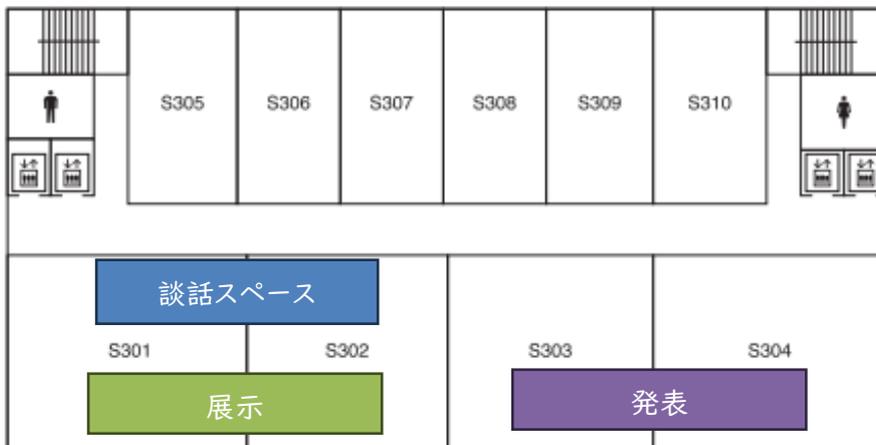
## 1階



## 2階



## 3階



2025 年度大学英語教育学会関西支部大会/ JAET Kansai Chapter 2025 Conference

全体プログラム/ Program

2026 年 3 月 7 日 (土) / March 7<sup>th</sup> (Sat) 2026

時間/ Time	内容/ Events					
8:50	【S102】 受付開始/ Registration Begins					
9:20– 9:30	【こみちホール】 開会式/ Opening Ceremony 司会 豊田 順子 (関西外国語大学)					
9:30– 10:00	研究発表/ Presentation			コロキウム/ Colloquium		
	001【S201】 [日本語] 三田 薫(実践女子大学) 霜田 敦子(実践女子大学)  大学英文ライティングにおける肯定的フィードバック機能を備えた AI 活用評価システムの開発と実践	002【S206】 [日本語] 坂本 輝世(滋賀県立大学)  学習者の視点からみた英語ライティング指導の課題: 質的データに基づく示唆	003【S303】 [English] FUJIOKA, Cheena (University of Marketing and Distribution Sciences)  Extensive Reading Implemented in Globalized University EFL Courses: How International Students Reacted to ER	004【S202】 [日本語] 石川 有香(名古屋工業大学) 石井 達也(高知大学) 香林 綾子(摂南大学) 三原 京(近畿大学)  大学英語教材の現状と課題: 何を、どう教え、どう評価するか	005【S203】 [日本語] 飯田 毅(同志社女子大学) 飯島 尚憲(慶應義塾大学大学院) デイヴィス 恵美(大阪成蹊大学) 村上 裕美(関西外国語大学短期大学部) 上野 裕子(大阪常磐会大学) 工藤 泰三(名古屋学院大学)  英語授業学における AI の活用と課題 – 学生と教員はどのように AI を利用しているか–	
10:00– 10:10	休憩/ Break					
10:10– 10:40	研究発表/ Presentation					
	006【S201】 [日本語] 豊田 順子(関西外国語大学) 田口 達也(愛知教育大学) ポールマン ジョシュア(関西外国語大学)  Experience Sampling Method (ESM) による状況的 L2 WTC の探究	007【S206】 [日本語] フ コウ(神戸大学大学院)  日本語・中国語母語の英語学習者および英語母語話者による英作文の対比型連結副詞類の使用実態 – 学習者コーパスに基づく量的研究–	008【S303】 [日本語] 大槻 きょう子(奈良県立大学)  代名詞の社会的意味とその戦略性			

10:40- 10:50	休憩/ Break					
10:50- 11:20	研究発表/ Presentation				ワーク ショップ /Workshop	コロキウム /Colloquium
	009【S201】 [日本語] 飯島 真之 (神戸 大学大学院)  日本人学習者による主張の強弱調整の国際比較: ICNALE の EFL 圏 6 地域の英作文データを用いて	010【S206】 [English] WHITE, Sean (Ryukoku University)  Integrating AI Technologies in L2 Composed Speech Practice	011【S303】 [日本語] 井上 拓也 (立命館大学) 服部 拓哉 (立命館大学) 大賀 まゆみ (立命館大学)、 近藤 雪絵 (立命館大学) 後藤 秀貴 (立命館大学)  英語プログラムにおける機械翻訳・生成 AI ガイドラインの導入と運用: 指導の公平性と柔軟性の両立を目指して		012【S202】 [日本語] 神谷 健一 (大阪工業大学)  AI による英語学習 -ChatGPT を中心に-	013【S203】 [日本語] 門田 修平 (高野山大学) 笠巻 知子 (京都外国語大学) 横川 博一 (神戸大学) 原田 洋子 (大阪公立大学)  AI 時代に求められる英語力を高める授業実践とは?
11:20- 11:30	休憩/ Break					
11:30- 12:00	研究発表/ Presentation					
	014【S201】 [日本語] 橋崎 諒太郎 (松山大学)  L2 連語表現学習における発声の効果: リスト間デザインを用いた実証的検討	015【S206】 [English] MURATA, Koichi (Setsunan University Graduate School)  Developing an Intercultural Communication Course Model Integrating Question Generation, Cultural Information Gathering, and AI-Based Material Creation	016【S303】 [日本語] 坂本 南美 (同志社大学)、青井 考起 (多治見市立笠原小学校)  交流英語授業における児童の変容と媒介的空間の生成—大学生の媒介行為に着目して—			
12:00- 12:10	【S203】 賛助会員フラッシュトーク/ Supporting Members Presentation 司会 デイヴィス 恵美 (大阪成蹊大学)					
12:10- 13:00	昼休み/ Lunch Break					

13:00- 14:30	<p style="text-align: center;">【こみちホール】</p> <p style="text-align: center;">基調講演 I / Keynote Speech: 安藤 昇 先生 / Professor Noboru Ando (青山学院大学/Aoyama Gakuin University; 株式会社バザール/ Bazaar Inc.)</p> <p style="text-align: center;">題目: 「最新の生成 AI ってどのようなことができるの!？」</p> <p style="text-align: center;">司会 上田 眞理砂 (立命館大学)</p> <p>概要: 近年、生成 AI (Generative AI) はテキスト、画像、音声、動画といった多様なメディアを自在に生み出す技術として急速に進化しています。本講演では、ChatGPT や Gemini、Claude、Suno などの代表的 AI の最新動向を紹介し、教育現場や研究活動における活用事例を具体的に示します。また、AI との共創によって新たに生まれる学びのスタイルや創造的表現の可能性についても考察します。AI を「使う」から「共に考える」時代への変化を、実演を交えてわかりやすく解説します。</p>					
14:30- 14:40	休憩 / Break					
14:40- 15:10	研究発表 / Presentation				コロキウム / Colloquium	
	<p>017【S201】 [日本語]</p> <p>坂井 純子 (大阪成蹊大学)</p> <p>榎本 英之 (大阪成蹊短期大学)</p> <p>伊藤 由紀子 (大阪成蹊大学)</p> <p>デイヴィス 恵美 (大阪成蹊大学)</p> <p>佐々木 緑 (大阪成蹊大学)</p> <p>短期海外研修における自己効力感を高める状況的要素の類型化 — 英語を学び続ける動機づけとしての学びの仕掛け—</p>	<p>018【S206】 [日本語]</p> <p>築地原 尚美 (滋賀県立大学)</p> <p>AI を生かした授業実践</p>	<p>019【S303】 [日本語]</p> <p>持留 沙智子 (立命館大学)</p> <p>社会人が職場で複数言語を用いる際の L2, L3 動機づけの変動について</p>	<p>020【S304】 [日本語]</p> <p>薦田 和美 (関西外国語大学)</p> <p>AI 導入の授業内課題—熟達度による比較</p>	<p>021【S202】 [日本語]</p> <p>萩澤 大輝 (近畿大学)</p> <p>吉田 幸治 (近畿大学)</p> <p>出水 孝典 (神戸学院大学)</p> <p>英語学の知見は AI 時代の英語教育にどう活かせるか</p>	<p>022【S203】 [日本語]</p> <p>大場 智美 (多摩大学)</p> <p>高坂 京子 (立命館大学)</p> <p>二五 義博 (山口学芸大学)</p> <p>ヨーロッパの外国語教育: 複眼的な思考力を育成するために</p>
15:10- 15:20	休憩 / Break					
15:20- 15:50	研究発表 / Presentation					
	<p>023【S201】 [日本語]</p> <p>和田 さつき (京都美山高等学校・元・常勤講師)</p> <p>ルター式英文法による不規則動詞変化表の再編提案 (2025 年度版中学 6 社比較)</p>	<p>024【S206】 [English]</p> <p>ISHIKAWA, Shin'ichiro (Kobe University)</p> <p>Contrastive Interlanguage Analysis and the ICNALE: The Recent Expansion of the Essay Module</p>	<p>025【S303】 [日本語]</p> <p>三原 京 (近畿大学)</p> <p>グローバル IT 技術者の育成に向けた留学プログラム構築の試み</p>	<p>026【S304】 [日本語]</p> <p>MUSTY, Nicholas (Kobe Gakuin University)</p> <p>Exploratory Practice and Its Potential for Pedagogy and Research</p>		
15:50-	休憩 / Break					

16:00	
16:00- 17:30	<p style="text-align: center;">【こみちホール】</p> <p style="text-align: center;">基調講演 2 / Keynote Speech: 日野 信行 先生 / Professor Emeritus Nobuyuki Hino (大阪大学名誉教授 / Professor Emeritus, The University of Osaka; 追手門学院大学教授/ Professor, Otemon Gakuin University)</p> <p style="text-align: center;">Title: Teaching EIL in an age of multicultural challenges 司会 蔦田 和美 (関西外国語大学)</p> <p>Overview: In many parts of the world today, multicultural diversity is being challenged by increasing social pressures. One possible remedy to this latest problem is the teaching of EIL (English as an International Language), a concept highlighted in the recent publication of The Routledge Handbook of Teaching English as an International Language (2025). In this talk, partly based on my four decades of efforts to teach EIL in Japan, I will discuss theories and practices in EIL education, aimed at helping students to embrace multicultural inclusivity as well as to express themselves in global communication. Relevant concepts, particularly ELF (English as a Lingua Franca), WE (World Englishes), and GE (Global Englishes), will be incorporated toward an integrated paradigm of EIL studies. Finally, I will briefly address the impact of AI on EIL as an immediate concern for the field.</p>
17:30-	<p style="text-align: center;">【こみちホール】</p> <p style="text-align: center;">閉会式/ Closing Ceremony 司会 豊田 順子 (関西外国語大学)</p>
17:45- 19:30 (予定)	<p style="text-align: center;">【キャンパス内 学生食堂 La Riviere】</p> <p style="text-align: center;">懇親会/ Networking Reception 司会 上田 眞理砂 (立命館大学)</p>

#### 研究発表司会者一覧

時間	司会担当			
	S201	S206	S303	S304
9:30~10:40	荒木 瑞夫 (近畿大学)	坂本 南美 (同志社大学)	亀本 真朱 (びわこ成蹊スポーツ大学)	---
10:50~12:00	阪上 潤 (立命館大学)	築地原 尚美 (龍谷大学)	マスティ ニコラス (神戸学院大学)	---
14:40~15:50	豊島 知穂 (京都産業大学)	大橋 香苗 (立命館大学)	松永 舞 (京都産業大学)	宮永 正治 (近畿大学)

## 研究発表詳細 / Research Presentations

Ref. No.	001
時間 / Time	09:30-10:00
会場 / Venue	S201
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	三田 薫 (実践女子大学)、霜田 敦子 (実践女子大学) MITA, Kaoru (Jissen Women's University), SHIMODA, Atsuko (Jissen Women's University)
発表タイトル / Title	大学英文ライティングにおける肯定的フィードバック機能を備えた AI 活用評価システムの開発と実践
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	<p>大学 1 年生必修英語科目におけるライティング自動評価システムの開発と分析を行った。目的は教師の採点負担を減らし、英文内容を客観的に評価することである。A~E の 5 モデルを開発し、A~C は機械学習、D・E は GPT-4o を使用した。Model D は教師評価との一致率 83.7%を達成したが評価不能ケースが頻発し、この問題解決のため Model E を開発した。Model E では「称賛に基づくフィードバック」機能を導入し、点数だけでなくエッセイの良い点について肯定的コメントを生成する。システムは過年度のサンプルエッセイデータベースや外部添削ツール CEFR-based Writing Level Analyzer (CWLA) へのアクセスも提供する。本発表では、2025 年度に Model E で自己評価を行った約 54 名の 1 年生へのアンケート結果および事前事後のライティングテストの結果の分析を報告する。初級学生は本システムを肯定的に評価し積極的な使用意欲を示した。今後のライティング教育における一層の AI 使用の可能性を提案する。</p>

Ref. No.	002
時間 / Time	09:30-10:00
会場 / Venue	S206
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	坂本 輝世 (滋賀県立大学) SAKAMOTO, Kiyō (The University of Shiga Prefecture)
発表タイトル / Title	学習者の視点からみた英語ライティング指導の課題: 質的データに基づく示唆
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	本研究の目的は、英語学習者が「英語で書く」活動をどのように経験してきたか、どのような認知的・情意的特徴をもつのかを質的に明らかにし、英語ライティング指導への示唆を得ることである。日本の大学生 12 名への半構造化インタビュー (計 7 項目) を実施し、Braun & Clarke (2021) の手続きに基づくテーマ分析を行った。分析の結果、①これまでのライティング学習に基づく「望ましいライティング」観、②英語での表現に伴う認知的負荷、③ライティングのテーマとライティングにおけるオーサーシップの関係、④将来の英語ライティング使用場面の可視化の難しさ、という 4 つの主要テーマが抽出された。これらの結果を第二言語ライティング研究の枠組みから考察し、学習者が書き手としての主体性を発揮できるようにするための指導上の工夫や、多様なジャンルを用いた授業デザインの必要性を指摘する。

Ref. No.	003
時間 / Time	09:30-10:00
会場 / Venue	S303
発表言語 / Language	英語 (English)
発表者(所属) / Name(s)	藤岡 千伊奈 (流通科学大学) FUJIOKA, Cheena (University of Marketing and Distribution Sciences)
発表タイトル / Title	Extensive Reading Implemented in Globalized University EFL Courses: How International Students Reacted to ER
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	<p>As the population of 18-year-olds declines in Japan, the number of international students in higher education institutions has increased in recent years. This presentation focuses on the impact of Extensive Reading (ER) on international students enrolled in a range of EFL courses at a Japanese university from 2020 to 2024. Sixty-four students from 10 countries participated in 17 classes with Japanese peers at a university in western Japan. Since 2020, X-Reading has been used online in ER classes, while paper books have been used in others. The reading target varies by class, and native books are used for a fluent student. The presenter will show the reading amount, the tasks/activities they liked, and the results of the C-Test conducted at the beginning and end of the semester. She will also include the data on their educational backgrounds and motives for taking English classes. The results of the comprehensive class survey have provided strong support for implementing ER linguistically and/or affectively for international students. However, the data indicated that ER using paper books had better outcomes than online reading overall. Most of all, ER conducted in a globalized learning environment created synergy for the international and Japanese students. (This will be a short version of the oral presentation given at the 7th World Congress on Extensive Reading at Hokusei Gakuen University on September 8th, 2025.)</p>

Ref. No.	004
時間 / Time	09:30-10:40
会場 / Venue	S202
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	石川 有香 (名古屋工業大学)、石井 達也 (高知大学)、香林 綾子 (摂南大学)、 三原 京 (近畿大学) ISHIKAWA, Yuka (Nagoya Institute of Technology), ISHII, Tatsuya (Kochi University), KOBAYASHI, Ayako (Setsunan University), MIHARA, Kei (Kindai University)
発表タイトル / Title	大学英語教材の現状と課題:何を、どう教え、どう評価するか
発表形式 / Type of Presentation	コロキウム Discussion by the presenters on the specific theme
発表概要 / Abstract	教材は、言語教育において中心的な役割を果たしており、学習者と教員の双方に、教育目標 や授業の方向性を示すための重要な指針でもある。本コロキウムでは、最初に、4名の発表 者が、それぞれの教育目標に応じてこれまでにどのような教材を開発してきたのか、または選 択してきたのかを紹介する。さらに、それらの教材を教室内でどのように活用し、どのような教 育的効果が得られたのか、また、どのような課題が残されているのかについて具体的な事例 を交えて報告する。次いで、Google 翻訳や DeepL 翻訳などのニューラル機械翻訳を自由 に利用できる社会に生きる学生への指導を前提としたとき、大学英語教育ではどのような教 材を用いて、何を、どう教えるべきか、そして、学習活動をどのように評価していくべきかにつ いて、参加者とともに議論を行う。

Ref. No.	005
時間 / Time	09:30-10:40
会場 / Venue	S203
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	飯田 毅 (同志社女子大学)、飯島 尚憲 (慶應義塾大学大学院)、デイヴィス恵美 (大阪成蹊大学)、村上 裕美 (関西外国語大学短期大学部)、上野 裕子 (大阪常磐会大学)、 工藤 泰三 (名古屋学院大学) IIDA, Tsuyoshi (Nagoya Institute of Technology), IIJIMA, Hisanori (Keio University Graduate School), DAVIS, Emi (Osaka Seikei University), MURAKAMI, Hiromi (Kansai Gaidai College), UENO, Yuko (Osaka Tokiwakai University), KUDO, Taizo (Nagoya Gakuin University)
発表タイトル / Title	英語授業学における AI の活用と課題 – 学生と教員はどのように AI を利用しているか–
発表形式 / Type of Presentation	コロキウム Discussion by the presenters on the specific theme
発表概要 / Abstract	本コロキウムの目的は英語授業学の観点から学生の AI 利用に対する考え及び教師の授業での AI 活用についてフロアーと共に考えることにある。言語教育における AI の進化と課題を振り返り、学生の AI 利用に関する質問紙調査及び教師の AI 活用について議論する。大学生約 300 人を対象とした質問紙調査結果の一つとして、因子分析から AI 利用頻度が高い学生ほど抵抗感は低い傾向が確認され、一方で抵抗感が低くても必ずしも利用頻度が高いとは言えず、両者の関係は一方向ではないことが示された。AI 活用スキルを高めるためのライティング指導実践例、学習者が AI を盲信せず英語運用能力を高める指導法についても報告する。日進月歩の AI 開発競争の現時点において英語授業学の観点から、フロアーとの意見交換を通して AI の活用と課題について問い直すことは重要な意味がある。AI を通して改めて英語学習の意味を考え、明日の授業につなげたい。

Ref. No.	006
時間 / Time	10:10-10:40
会場 / Venue	S201
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	豊田 順子 (関西外国語大学)、田口 達也 (愛知教育大学)、ボールマン ジョシュア(関西外国語大学) TOYODA, Junko (Kansai Gaidai University), TAGUCHI, Tatsuya (Aichi University of Education), BOLLMAN, Joshua (Kansai Gaidai University)
発表タイトル / Title	Experience Sampling Method (ESM) による状況的 L2 WTC の探究
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	第 2 言語 (L2) におけるコミュニケーション意欲 (Willingness to Communicate: L2 WTC) 研究では、影響要因や学習者の WTC 変動に焦点が当てられてきた。L2 WTC の測定方法には、1)発話場面で即時的に自己評価する方法と、2)活動後に想起して評価する方法があるが、前者は大量の反復測定が困難であり、後者はその場の心理状態を正確に捉えられないという課題がある。本研究ではこれらの問題を克服するため、心理学分野で用いられる Experience Sampling Method (ESM) を導入し、大学 1 年生 95 名を対象に授業内での L2 WTC をリアルタイムで測定した。本発表では、ESM を用いた具体的なデータ収集・分析手法を示し、学習者の心理変動を精緻に捉える研究アプローチとしての有効性を検討する。

Ref. No.	007
時間 / Time	10:10-10:40
会場 / Venue	S206
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	フ コウ (神戸大学大学院) FU, Gang (Kobe University Graduate School)
発表タイトル / Title	日本語・中国語母語の英語学習者および英語母語話者による英作文の対比型連結副詞類の使用実態 —学習者コーパスに基づく量的研究—
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	英語の連結副詞は文要素の接続性を明確化する。複数の先行研究が学習者による連結副詞使用の課題を指摘しているが(Shi,2017; Wang,2022)、そこには特定母語の学習者しか扱っていない、習熟度の影響を議論していないといった制約もある。そこで本研究では、対比型連結副詞(contrastive linking adverbials:ConLA)に焦点を絞り、アジア圏英語学習者コーパス(International Corpus Network of Asian Learners of English) ICNALE(Ishikawa, 2023)に収録された Japanese Learner of English(JLE)・Chinese Learner of English(CLE)・English Native Speaker(ENS)の作文データに改訂版中間言語対照分析(Granger, 2015)を適用した。その結果、(1)CLEとJLEが過剰・過少使用するConLAが存在する、(2)ConLAの使用量に習熟度の影響が認められる、(3)ConLAの使用位置にも差が認められる、といった結果が得られた。これらの知見は、JLEやCLEを対象としたライティング指導においてConLAの適切な使用を指導する際のヒントを提供する。本発表はJACET関西支部第1回研究交流会における研究発表内容を全面的に拡充したものである。

Ref. No.	008
時間 / Time	10:10-10:40
会場 / Venue	S303
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	大槻 きょう子 (奈良県立大学) OTSUKI, Kyoko (Nara Prefectural University)
発表タイトル / Title	代名詞の社会的意味とその戦略性
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	<p>代名詞の学習は人称の形式、格変化、複数・単数の概念などが主たる内容であるが、時に規範主義的な教育観を問題視される。また、その対極の記述主義的な態度も実際のテキストでの代名詞の使用による政治的含意の発生を見逃しているという問題があり、このため代名詞は単なる文法項目として扱うべきではない。本発表では、代名詞の検証によってテキスト中の包摂、排除、権力行使、アイデンティティ構築を可視化する。Rees (1983)の代名詞選択と心理的距離との関係を捉える尺度を使い、イギリスの住民投票実施時のフライヤー及び新聞記事に使われる多様な代名詞の用法を調べた結果、we だけに共同体アイデンティティへの極端な求心性が見られた。住民投票という誰もまだ見ぬ未来へ向けて語り手と聞き手に対等な関係が見て取れる。これを基に英語教育における言語の社会的・政治的側面への配慮の必要性から代名詞の学習について教育的示唆を提示する。</p>

Ref. No.	009
時間 / Time	10:50-11:20
会場 / Venue	S201
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	飯島 真之 (神戸大学大学院) IIJIMA, Masayuki (Kobe University Graduate School)
発表タイトル / Title	日本人学習者による主張の強弱調整の国際比較: ICNALE の EFL 圏 6 地域の英作文データを用いて
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	<p>言語使用時に、主張に強弱をつけることはごく自然に行われることであり、現代英語においては、主張を弱めるヘッジ (hedges) (例: perhaps, probable) や、主張を強めるブースター (boosters) (例: definitely, obvious) (Hyland, 2019) がその役割を担う。本研究は、L2 の観点から、学習者コーパス ICNALE の英作文データを使用し、日本人学習者のヘッジ・ブースターの使用実態を、EFL 圏学習者 (中国・台湾・韓国・タイ・インドネシアの 5 群)、および英語母語話者 (大学生・英語教師・その他職業の 3 群) と比較することで考察する。L1・L2 における関連表現の使用については、これまでも、保田 (2021)、石川 (2022)、Escalona (2025) 等の先行研究において扱われてきたが、本研究は、L2 の国際比較を踏まえた考察を行う。地域・母語話者別に 1 作文当たりの平均頻度を調査し、階層的クラスター分析、対応分析等の手法により、(1) EFL 地域の学習者と母語話者の使用表現の差や (2) EFL 地域内部における差が取り出された。</p>

Ref. No.	010
時間 / Time	10:50-11:20
会場 / Venue	S206
発表言語 / Language	英語 (English)
発表者(所属) / Name(s)	ホワイト ショーン (龍谷大学) WHITE, Sean (Ryukoku University)
発表タイトル / Title	Integrating AI Technologies in L2 Composed Speech Practice
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	<p>Research on the use of generative and other artificial intelligence (AI) technology in language learning has pointed to several key benefits: individualized and interactive learning, model text generation, timely correction and feedback, and positive effects on learning enjoyment and motivation—all of which contribute to the development of second language skills, learner autonomy, self-efficacy, and metacognition. This talk introduces a multimodal approach for developing short speeches and presentations by university English learners. The method incorporates generative and other AI technologies to promote learner agency and authenticity while taking advantage of the benefits identified in previous research. The process begins with students composing original speech drafts without AI assistance. Drafts are then submitted to ChatGPT and other large language model (LLM) AI chatbots with specific prompts for organization and content feedback based on a rubric, along with requests for lexical and syntactic error correction. Students receive both AI and instructor feedback for revision. Next, students use text-to-speech (TTS) tools to practice listening and shadowing with AI-generated models of their own texts. Finally, students record their speech and receive AI feedback on fluency, pronunciation, and language features, allowing for focused practice before their final in-class presentation. In order to promote transparency and integrity, students keep track of their use of AI and other tools via an online form shared with the instructor. Following the final presentation, students reflect on their tool use and how it affected their learning. Participating class survey data indicate positive student perceptions, with some individual variation. Overall, students describe AI as a useful tool that complements—not replaces—instructor feedback and support. Reported difficulties include task and tool complexity and perceived burden of process tracking. Suggestions for addressing these, as well as overall implementation that contribute to student development of AI literacy, will also be provided.</p>

Ref. No.	011
時間 / Time	10:50-11:20
会場 / Venue	S303
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	井上 拓也 (立命館大学)、服部 拓哉 (立命館大学)、大賀 まゆみ (立命館大学)、 近藤 雪絵 (立命館大学)、後藤 秀貴 (立命館大学) INOUE, Takuya (Ritsumeikan University), HATTORI, Takuya (Ritsumeikan University), OGA, Mayumi (Ritsumeikan University), KONDO, Yukie, (Ritsumeikan University), GOTO, Hideki (Ritsumeikan University)
発表タイトル / Title	英語プログラムにおける機械翻訳・生成 AI ガイドラインの導入と運用:指導の公平性と柔軟 性の両立を目指して
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	本発表では、立命館大学プロジェクト発信型英語プログラム (Project-based English Program: PEP) における機械翻訳・生成 AI 利用ガイドラインの策定プロセスを報告する。ガイドラインは、①教員アンケート、②アンケート結果に基づく草案作成、③教員からのフィードバック、④フィードバックに基づく最終版の作成、という修正版デルファイ法を援用した 4 段階の合意形成プロセスで策定された。アンケートに基づいて作成されたガイドライン草案は、禁止事項を強調する「制限」的な色彩が強く、フィードバックと議論の中でプログラムの教育理念である「学生の自律性」と矛盾するのではないかとの懸念が示された。その結果、最終版では、学生が AI を成長のサポート役として捉え、自らの成果物に「責任」を持つことを促すガイドラインへと修正された。このようなガイドラインの作成は、組織としての教育理念を再確認し、教員間の合意形成を図る重要な機会となる。

Ref. No.	012
時間 / Time	10:50-12:00
会場 / Venue	S202
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	神谷 健一 (大阪工業大学) KAMIYA, Kenichi (Osaka Institute of Technology)
発表タイトル / Title	AIによる英語学習 -ChatGPTを中心に-
発表形式 / Type of Presentation	ワークショップ Presentations including tasks for the participants
発表概要 / Abstract	<p>発表者は非常勤先の京都産業大学で「AIによる外国語学習」という半期完結科目を担当している。この科目は外国語学部の選択必修科目の1つで、10言語いずれかを専攻する学生が履修する、機械翻訳の仕組みや音声合成なども扱う科目である。実績としては2025年度春学期240名、秋学期160名程度の履修登録があるが、この授業実践から英語学習に適したChatGPT利用に絞った内容を紹介する。</p> <p>近年は別の生成AIも利用されているが、テキスト生成が中心であることやコンテキスト保持度合いなどを勘案すると現状なおChatGPTに分があると考えているため、学生にも積極的にChatGPTを利用させている。</p> <p>同様の内容を今年度中に2回、JACET関西支部の企画である研究交流会で実施したが、オンライン開催のため個別サポートなどが十分にできなかった。対面開催の利点を活かし、生成AIの利用拡大に繋げていきたいと願っている。</p>

Ref. No.	013
時間 / Time	10:50-12:00
会場 / Venue	S203
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	門田 修平 (高野山大学)、笠巻 知子 (京都外国語大学)、横川 博一 (神戸大学)、 原田 洋子 (大阪公立大学) KADOTA, Shuhei (Koyasan University), KASAMAKI, Tomoko (Kyoto University of Foreign Studies), YOKOKAWA, Hirokazu (Kobe University), HARADA, Yoko (Osaka Metropolitan University)
発表タイトル / Title	AI時代に求められる英語力を高める授業実践とは？
発表形式 / Type of Presentation	コロキウム Discussion by the presenters on the specific theme
発表概要 / Abstract	第一に笠巻が、「AI活用を組み込んだリーディング授業デザインと学習者エンゲージメント」というタイトルで、リーディング素材英文に対する意見を英語でまとめ、AIの支援のもと推敲・発表する活動を実践した結果、言語に主体的に向き合う姿勢を身につけられることを報告する。第二に横川が、「リーディングの認知プロセスからみた AI の活用と言語処理能力の育成」というタイトルで、リーディング中心の活動で AI を、どう活用できるか、活用すべきでないかについて、リーディングの認知プロセスの観点から考察し、さらに基盤言語運用能力育成に、リテリング活動の AI 応用について報告する。最後に門田が、「社会脳インタラクション能力向上のために AI を活用したプラクティス」というタイトルで、社会脳インタラクション能力 (Social Brain Interactional Competence: SBIC) 向上に役立つ方法として、絵・写真の描写、英語3文日記などで、「リード・アンド・ルックアップ」を活用した方法について報告する。

Ref. No.	014
時間 / Time	11:30-12:00
会場 / Venue	S201
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	橋崎 諒太郎 (松山大学) HASHIZAKI, Ryotaro (Matsuyama University)
発表タイトル / Title	L2 連語表現学習における発声の効果:リスト間デザインを用いた実証的検討
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	本研究は、先行研究においてリスト内デザイン(同一の学習リストに対して複数の学習方法を適用)でのみ効果が確認されてきた、第二言語連語表現学習における発声の効果が、リスト間デザイン(1つのリストに対して1種類の学習方法を適用)においても再現されるか検証した。日本人英語学習者 68 名を対象に、5 つの学習条件(リスニング、文字とリスニング、リピート、文字とリピート、学習なし)と 3 種類のテスト(形式認識、形式産出、意味認識)、および 2 種類のテスト様式(文字、音声)を組み合わせ、一般化線形混合モデルにより分析した。結果、文字テストでは形式認識において、リピートおよび文字とリピートが高い効果を示し、音声テストでは形式産出において文字とリピートが最も高い学習効果を示した。発声記憶痕跡を強化する強化痕跡説と、学習時とテスト時の処理が一致する場合に成績が向上するという転移適切性処理説に基づき、考察をする。

Ref. No.	015
時間 / Time	11:30-12:00
会場 / Venue	S206
発表言語 / Language	英語 (English)
発表者(所属) / Name(s)	村田 幸一 (摂南大学大学院) MURATA, Koichi (Setsunan University Graduate School)
発表タイトル / Title	Developing an Intercultural Communication Course Model Integrating Question Generation, Cultural Information Gathering, and AI-Based Material Creation
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	<p>This study reports on the development and implementation of an intercultural communication course model that integrates student-generated questions, cultural information gathering, and AI-assisted material creation. The purpose of the course was to support international students' understanding of Japanese culture while enhancing their ability to express their own cultural perspectives through structured interaction with Japanese students. First, Japanese students selected cultural and social topics of interest and created interview questions for international students. Next, they collected relevant cultural background information using online resources. Generative AI was then used to reorganize these questions and cultural explanations into learning materials adjusted to the Japanese language proficiency levels of international students. International students studied the AI-generated materials and responded to the questions through small-group discussions. Based on the discussion outcomes, the responses produced by international students were combined with the original Japanese-language materials and translated into English. These bilingual materials were subsequently used as feedback resources and learning materials for Japanese students. Through this reciprocal process, both groups engaged in reflecting on how cultural meanings were conveyed and interpreted across languages. The results of the course implementation indicated several educational benefits. AI-generated materials contributed to deeper understanding of Japanese cultural topics among international students and increased their confidence in expressing their own cultural viewpoints. Japanese students, in turn, developed greater awareness of how to explain cultural concepts clearly and effectively to non-native speakers. In addition, the structured question-and-answer format helped reduce communication anxiety for both international and Japanese students, facilitating more meaningful and sustained interaction. These findings suggest that an instructional model that explicitly integrates question generation, cultural information gathering, and AI-based material creation—supported by reflective use of bilingual learning materials—can effectively enhance intercultural communication in classrooms where learners with diverse cultural and linguistic backgrounds study together.</p>

Ref. No.	016
時間 / Time	11:30-12:00
会場 / Venue	S303
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	坂本 南美 (同志社大学)、青井 考起 (多治見市立笠原小学校) SAKAMOTO, Nami (Doshisha University), AOI, Koki (Kasahara Elementary School)
発表タイトル / Title	交流英語授業における児童の変容と媒介的空間の生成—大学生の媒介行為に着目して—
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	本研究は、異文化理解と多様性尊重を目的とする大学生と小学校 2 年生との交流英語授業において、児童の気づきや意識の変容がどのように支えられ、教室が媒介的空間 (mediational space) として立ち上がったかを質的に明らかにすることを目的とする。これまで媒介的空間に関する研究は、主に教師や学習者の内省や語りに基づいて論じられてきたが、交流授業における教室内相互行為の生成過程に即した検討は十分とは言えない。本研究では、大学生が媒介者として関与した交流授業の授業映像、児童・大学生の振り返り記述、大学生による授業デザインおよび教材を分析対象とした。その結果、授業デザインに組み込まれた問い方や活動構成、ICT の使い方、ならびに学生による即時的な問い返しや言い換え、身体的関わりといった媒介行為が相互に作用することで、児童の文化的気づきや感情表出が引き出され、教室が意味を協働的に構築する媒介的空間として機能していたことが示唆された。

Ref. No.	017
時間 / Time	14:40-15:10
会場 / Venue	S201
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	坂井 純子 (大阪成蹊大学)、榎本 英之 (大阪成蹊短期大学)、伊藤 由紀子 (大阪成蹊大学)、デイヴィス 恵美 (大阪成蹊大学)、佐々木 緑 (大阪成蹊大学) SAKAI, Sumiko (Osaka Seikei University), KASHIMOTO, Hideyuki (Osaka Seikei College), ITO, Yukiko (Osaka Seikei University), DAVIS, Emi (Osaka Seikei University), SASAKI, Midori (Osaka Seikei University)
発表タイトル / Title	短期海外研修における自己効力感を高める状況的要素の類型化 —英語を学び続ける動機づけとしての学びの仕掛け—
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	本研究では、短期海外研修に参加した大学・短期大学生の振り返りレポートを質的に分析し、学業的自己効力感の形成過程を明らかにした。分析の結果「初期不安」「小さな成功体験」「気づきと行動変化」という三段階のプロセスが見られ、これらは Bandura (1997) の自己効力感理論と整合し、短期的な体験であっても受容的環境での成功体験が自己効力感を高めることを示した。さらに、自己効力感が形成される環境として「クラスルームゾーン」「疑似体験ゾーン」「実社会体験ゾーン」の順にコミュニケーションのスタイルが分類され、それぞれのゾーンを行き来しながら肯定的な自己認識を強化していくことがわかった。研修後の省察活動は学習意欲の維持に有効であり、事前学習と連携させることでプログラムのPDCA サイクル確立に寄与するであろう。

Ref. No.	018
時間 / Time	14:40-15:10
会場 / Venue	S206
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	築地原 尚美 (滋賀県立大学) TSUICHIBARU, Hisami (The University of Shiga Prefecture)
発表タイトル / Title	AI を生かした授業実践
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	<p>本発表では、日本の大学生を対象に、AI ツール Copilot とピア・フィードバックを組み合わせた英語ライティング授業の実践と、その教育的効果を報告する。授業では、AI 支援と Peer Review を有機的に統合することで、学習者の英語表現力と自律的学習力の向上を図った。協働的でありながら個々の学習ニーズに即した最適化された学習環境の構築を試み、その成果と課題を質問紙調査および学習成果データに基づき実証的に考察した、授業改善と今後の AI 活用型ライティング指導に対する具体的示唆を提示する。加えて、教師によるフィードバックと AI・ピア・フィードバックの効果を比較分析した結果、人間による応答的で文脈依存的なコメントが学習者の動機づけと深い省察を促す上で依然として重要であることが再確認され、教師・学習者との協働を前提とした補完的活用の必要性が示唆された。</p>

Ref. No.	019
時間 / Time	14:40-15:10
会場 / Venue	S303
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	持留 沙智子 (立命館大学) MOCHIDOME, Sachiko (Ritsumeikan University)
発表タイトル / Title	社会人が職場で複数言語を用いる際の L2,L3 動機づけの変動について
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	本研究の目的は、社会人が職場で複数言語を使用する際に、どのように外国語学習への動機づけを形成し、維持しているのかを明らかにすることである。アジアを中心とした訪日外国人の増加に伴い、今後は英語以外の第三言語(L3)の言語を学ぶ必要性が高まる可能性が考えられる。そこで、韓国系航空会社で日本語・韓国語・英語を用いて働く社会人 3 名を対象に、学習経験と動機づけに関するアンケートおよび半構造化インタビューを実施した。データ分析はグラウンデッド・セオリーのコーディングプロセスを参考に行い、Dörnyei の L2 Motivational Self System (2005, 2009) を理論的枠組みとして考察した。その結果、全員が韓国文化への関心を持って明確な理想自己を形成していたが、「働く理想自己」の具体像やコミュニティへの関与の度合いには差が見られた。外国語学習においては、理想自己の形成のみならず、実現後に新たな理想自己を再構築することが、継続的な学習動機づけに重要であることが示唆された。

Ref. No.	020
時間 / Time	14:40-15:10
会場 / Venue	S304
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	蔦田 和美 (関西外国語大学) TSUTADA, Kazumi (Kansai Gaidai University)
発表タイトル / Title	AI 導入の授業内課題－熟達度による比較
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	AI の英語教育への導入が多岐に論じられている中、AI を媒体に文法や表現を学ぶことを目的とする課題を実施した。課題は、最新のニュースの日英翻訳で、自分で英訳をしたのちに複数の AI 翻訳との比較を介して、気づきを得るとともに新たな語彙および文法習得を促すものである。対象学生を熟達度別 (upper-intermediate, lower-intermediate) に二つのグループに分け、同じ課題とアンケート調査を実施し、それぞれのグループの成果物に基づき学びの深さを精査するとともに、学生の反応を分析した。その結果、本手法については熟達度の高い方が、より高い効果を得ることが示された。よって、対象学生数や課題内容が限定された状況下ではあるが、AI 導入において一定の英語力を有することの意義が示される一例となった。

Ref. No.	021
時間 / Time	14:40-15:50
会場 / Venue	S202
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	萩澤 大輝 (近畿大学)、吉田 幸治 (近畿大学)、出水 孝典 (神戸学院大学) HAGISAWA, Daiki (Kindai University), YOSHIDA, Koji (Kindai University), DEMIZU, Takanori (Kobe Gakuin University)
発表タイトル / Title	英語学の知見は AI 時代の英語教育にどう活かせるか
発表形式 / Type of Presentation	コロキウム Discussion by the presenters on the specific theme
発表概要 / Abstract	本コロキウムの目的は、AI 時代の英語教育と英語学との共生のあり方を考察することである。各登壇者は英語学の知見を平易に提示し、その知見が AI によって得られる情報と相補的であること、また教育現場において有益であることを論じる。吉田発表では連語関係を対象とし、文法が自律的知識ではないことと、AI では意図的にバイアスが加えられている文化情報を修正した指導が重要であることを指摘する。出水発表では recognize という具体的な動詞に焦点を当て、語彙意味論に基づく分析と AI を利用した教示法の案を示す。萩澤発表では名詞句を再述する構文を関連する他の構文とのネットワーク内に位置づけた上で、そうした理解の利点を、AI を活用しつつ述べる。全体として、学びに伴う学習者個人の体験や、指導者が地道に収集した知識と経験は、今後いかに技術が進歩しようとも、AI 等では代用が効かない側面として残るということを示したい。

Ref. No.	022
時間 / Time	14:40-15:50
会場 / Venue	S203
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	大場 智美 (多摩大学)、高坂 京子 (立命館大学)、二五 義博 (山口学芸大学) OHBA, Tomomi (Tama University), KOSAKA, Kyoko (Ritsumeikan University), NIGO, Yoshihiro (Yamaguchi Gakugei University)
発表タイトル / Title	ヨーロッパの外国語教育:複眼的な思考力を育成するために
発表形式 / Type of Presentation	コロキウム Discussion by the presenters on the specific theme
発表概要 / Abstract	2001年に欧州評議会と欧州連合が共同で欧州言語年を定め、言語学習の重要性を広く訴えかけた。ヨーロッパでは言語的多様性は資産であるという認識から「複言語・複文化主義」が唱えられ、「母語+2言語/外国語」の習得が推進されている。本コロキウムでは、イングランド、オランダ、オーストリアを取り上げ、現地教育機関の訪問調査結果を報告しながら、各国の外国語教育の現状と課題を分析する。英語が母語であるがゆえに外国語教育に課題をかかえるイングランド、早期教育やバイリンガル教育が普及し世界トップレベルの英語力を保持するオランダ、初等段階から体系的に英語を教える Content and Language Integrated Learning (CLIL)も取り入れるオーストリアの実践例を考察することにより、日本の外国語教育がそこから何を学べるのかを示唆する。また、これらの国が複数の外国語教育を実践している点にも着目し、複眼的な思考力を育成するための外国語教育のあり方についても考えたい。

Ref. No.	023
時間 / Time	15:20-15:50
会場 / Venue	S201
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	和田 さつき (京都美山高等学校・元・常勤講師) WADA, Satsuki (ex-teacher of Kyoto Miyama High School)
発表タイトル / Title	ルター式英文法による不規則動詞変化表の再編提案(2025年度版中学6社比較)
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	本研究は、2025 年度版の中学校英語教科書6社に掲載された【不規則動詞変化表】を比較・分析し、その構成上の課題を明確化するとともに、発音・記憶支援の観点から改訂案を提示することを目的とする。Quirk et al.(1985)の分類に基づき、掲載語の選定・和訳・型区分を検討した結果、1社のみ未掲載の語が存在すること、「see=見る」「hear=聞く」「wear=身につける」など誤解を招く和訳が広く用いられていること、さらに beat は AAB 型、read は ABB 型に分類すべきことが明らかになった。また、現行表は発音的まとまりを欠き(三単現・ing 形の併記も煩雑化の要因となる)、学習者が声に出して記憶する構造になっていない点も確認された。そこで本研究は、音声変化に基づく再編を行った「ルター式不規則動詞 75 語」や、発音記号へのカナ付与、3年間通しの語形変化フォーマットを提案する。これらは教室での指導と学習の双方に有効な基盤となる。

Ref. No.	024
時間 / Time	15:20-15:50
会場 / Venue	S206
発表言語 / Language	英語 (English)
発表者(所属) / Name(s)	石川 慎一郎 (神戸大学) ISHIKAWA, Shin'ichiro (Kobe University)
発表タイトル / Title	Contrastive Interlanguage Analysis and the ICNALE: The Recent Expansion of the Essay Module
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	<p>Contrastive Interlanguage Analysis (CIA) (Granger, 1996/2015) is a principal analytic framework widely used in learner corpus research. Its original version (CIAI) consisted of the two kinds of comparisons between NL (native language) and IL (interlanguages), and between different ILs, while its revised version consists of three kinds of comparisons of RLV (reference language varieties), ILV (interlanguage varieties), and RLV and ILV. A more detailed comparison scheme guarantees enhanced reliability of LCR. The International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) (Ishikawa, 2023) has been consistently designed as a dataset suitable for sophisticated CIA practices. After the recent release of the WE Plus module, the ICNALE now includes two kinds of topic-controlled essays written by college students from 19 countries and regions in Asia (EFL: Cambodia, China, Indonesia, Japan, Korea, Laos, Myanmar, Nepal, Taiwan, Thailand, Vietnam; ESL: Bangladesh*, Brunei*, Hong Kong, India, Malaysia*, Pakistan, Singapore, the Philippines [* Regions using English as a de facto working language]), as well as three kinds of L1 English speakers with different occupational backgrounds. By comparing these writers in various combinations, one could reliably identify the similarities and dissimilarities of a variety of writer groups in Asia. This presentation shows the result of classifying 22 writer groups in terms of the frequency of the top 100 words. Two kinds of multivariate analyses, cluster analysis and correspondence analysis, have suggested participants' essays are classified into four archetypal discourse types: I-oriented, we/you-oriented, they-oriented, and impersonal description-oriented. Such a data-based finding would help local teachers think about the possibility of developing a "tailor-made" English language teaching program most suitable for their students.</p>

Ref. No.	025
時間 / Time	15:20-15:50
会場 / Venue	S303
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者(所属) / Name(s)	三原 京 (近畿大学) MIHARA, Kei (Kindai University)
発表タイトル / Title	グローバル IT 技術者の育成に向けた留学プログラム構築の試み
発表形式 / Type of Presentation	実践報告 Presentations on classroom activities and curriculum development
発表概要 / Abstract	<p>近年のグローバル化に伴い、留学プログラムを用意している大学・学部は多い。しかし実験・実習の多い理系の学部は、4年間で卒業できる留学プログラムの構築が難しいのが現状である。コロナ禍には様々なオンライン・プログラムが考案されたが、近年は再び対面催行されていることから、現地で得られるものも多いのかもしれない。</p> <p>本発表では、2022年4月に開設された情報学部における独自留学プログラム構築の試みについて報告する。端を発したのは、開設年度の2022年、全学部対象に実施された留学に関する学生の意識調査で、情報学部の学生が突出してアメリカへの関心が高いという結果が出たことである。これを受け、留年せずにアメリカの大学で専門科目を履修する留学プログラムを考案すると共に、様々な学生のニーズに応えるため、短期研修プログラムも構築した。メディア授業も有効活用した独自留学プログラムの現状と課題について報告する。</p>

Ref. No.	026
時間 / Time	15:20-15:50
会場 / Venue	S304
発表言語 / Language	英語 (English)
発表者(所属) / Name(s)	マスティー ニコラス (神戸学院大学) MUSTY, Nicholas (Kobe Gakuin University)
発表タイトル / Title	Exploratory Practice and Its Potential for Pedagogy and Research
発表形式 / Type of Presentation	研究発表 Presentation on theoretical and practical studies
発表概要 / Abstract	<p>Exploratory Practice (EP) is a methodology of practitioner research which involves key stakeholders, often teaching faculty and students, in creating puzzles, an equivalent to the research question, which they go on to solve collaboratively without deference to a professional researcher. As a result, learners gain valuable insights to the entire research process and a sense of autonomy, while their heightened engagement encourages more considered outcomes. As part of his doctoral studies, the presenter is involved in a programme of EP with university students of English in Japan. This involves a senior team of students in carrying out research on the theme of emotions in the language classroom, determining an approach to learning more about this phenomenon through research on the wider student population. This presentation will focus on EP as a methodology, drawing on previous studies which extol its benefits to support the learnings gained through this project so far. The presenter will demonstrate the vast potential for combining teaching and research through EP. In addition, suggestions will be made regarding how to utilise EP in a way that will lead to the upscaling of institutions' potential for research and the upskilling of both instructors and the wider student body.</p>

### 謝辞

本支部大会の開催にあたり、大阪成蹊大学のご厚意により、会場を無償で使用させていただくことができました。また、株式会社朝日出版社、ETS Japan 合同会社、オックスフォード大学出版局、株式会社教育測定研究所、株式会社三修社、株式会社成美堂、ピアソン・ジャパン株式会社、株式会社ベネッセ i-キャリア(50音順)の8社には出展のご協力をいただきました。支部として、関係各位のご支援に深く感謝を申し上げます。

### Acknowledgements

We are deeply grateful to Osaka Seikei University for generously providing the venue free of charge for this conference. Also, we appreciate Asahi Press, ETS Japan, Oxford University Press, JIEM, Sanshuha, Seibido, Pearson Japan, and Benesse-i Carrier for their exhibition support. We extend our sincere appreciation for this support.

---

作成・発行 大学英語教育学会関西支部 研究企画委員会 (2025年度)

委員長 蔦田 和美 (関西外国語大学)  
副委員長 豊田 順子 (関西外国語大学)  
副委員長 後藤 秀貴 (立命館大学)  
委員 荒木 瑞夫 (近畿大学)、デイヴィス 恵美 (大阪成蹊大学)、亀本 真朱 (びわこ成蹊スポーツ大学)、Musty, Nicholas (神戸学院大学)、松永 舞 (京都産業大学)、宮永 正治 (近畿大学)、西条 正樹 (日本大学)、野島 晃子 (平安女学院大学)、大橋 香苗 (立命館大学)、坂本 南美 (同志社大学)、阪上 潤 (立命館大学)、白井 由美子 (神戸女学院大学)、豊島 知穂 (京都産業大学)、築地原 尚美 (滋賀県立大学)、山中 司 (立命館大学)、上田 眞理砂 (立命館大学)